



Title	中岡成文教授 功績覚書
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2014, 45, p. 18-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51523
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中岡成文教授 功績覚書

中岡成文氏は、1973（昭和48）年3月に京都大学文学部哲学科を卒業し、1975（昭和50）年3月同大学院文学研究科修士課程哲学専攻を修了、文学修士を授与される。続いて1978（昭和53）年3月、同博士課程を単位習得満期退学した後、1980（昭和55）年4月福岡女子大学文学部専任講師に着任、翌年助教授となり、哲学を教える。1987（昭和62）年4月には大阪大学教養部助教授（哲学担当）に就任、1994（平成6）年4月から大阪大学文学部助教授に配置換えとなり、哲学講座倫理学を担当、1996年（平成8）年9月大阪大学文学部教授に昇任。1999（平成11）年4月には大学院重点化にともない大阪大学大学院文学研究科教授となる。2001（平成13）年4月から退職まで大阪大学医学系研究科教授を兼任し、医の倫理学を担当する。また、2005（平成17）年4月に大阪大学に発足したコミュニケーションデザイン・センターの初代センター長を2007年まで兼任する。

同氏の研究研究関心とその業績は多岐にわたり、いずれもさまざまなスタイルで執筆されている。いくつもの分野をまたぐこうした論考群は、互いに呼応しつつ、固有の思索のネットワークを形成している。このネットワークに仮に表層的な区切りを持ち込むならば、思想史研究、現代哲学研究、臨床哲学の研究実践活動の3つの系が現れるだろう。

まず、思想史研究の系に関して。氏は体系期以前の初期ヘーゲル哲学の研究を中心とした数多くの論文を著し、解釈学や精神分析、フランス・ポスト構造主義などの現代思想に示唆を受けつつ、積極的にマイナーな地点からヘーゲルを読み解す独創的な思考を展開した。これらの研究は後の臨床哲学を含めた氏の思索活動の支柱となっている。また、西洋思想のみならず日本思想に対しても一貫した関心が向けられ、とくに西田幾多郎に関するさまざまな切り口からの論考が注目される。なかでも臨床哲学のアプローチが活かされた『私と出会うための西田幾多郎』（1999年）は、抽象性ならぬ具体性あふれる点において数多ある西田論のなかでも異彩を放っている。さらに、歴史・社会・思想が独特の星座図を描いた歴史的特異点としての1930年代に着目し、東西の思想を横断的に論じる「30年代思想」の共同研究においても、田辺元、三木清、デューイ、バシュラールなどを考察する多くの貢献を果たしている。ほかにも、思想史に関連する業績として、『ヘーゲル哲学の現在』（1988年）、『西洋哲学史〔近代編〕——科学の形成と近代思想の展開』（1995年）を始めとして、数々の教科書および入門書を共編および共著として刊行している。

次に、現代哲学研究の系に移ると、解釈学、精神分析、知識・科学論、コミュニケーション理論、システム論、社会哲学、生命倫理学などの分野において幾多の貢献がみられる。現代ドイツをリードするハーバーマスに関する日本で初めての包括的な研究書であるとともに格好の入門書である『ハーバーマス——コミュニケーション行為』（1996年）は、注目されがちな中期のコミュニケーション行為理論に先行する、才気あふれる若きハーバーマスに力点を置きつつ、同時代の哲学者の関心の在処とその展開を、上段にすえることなくあくまで対等に、かつ生々しく描いている。また、氏は哲学研究者として早くからニクラス・ルーマンの社会システム論に注目し、『システムと共同性——新しい倫理の問題圏』（1994年）などの著作を通して、その現代倫理学への

接合を試みつつも、社会理論にとどまらないルーマンの哲学的洞察を読み取り、そこから「意味」「差異」「パラドックス」「境界」などの概念群を我がものとし、思想史研究と臨床哲学にまたがる氏独自の思索の展開のために役立てている。同様に、氏は、主体なき思考に挑戦するフランス・ポスト構造主義の哲学者にも熱い視線を送りながらも、同時代の日本の研究者が黙殺あるいはこの思潮の消化吸収に二分されるなか、ヘーゲル研究者として主体性擁護の論陣を張り、真摯な対話を行う。以上に関連しながら、『知のパラドックス』（1998年）、『戦争責任と「われわれ」——「歴史主体」論争」をめぐる』（1999年）、『生命、岩波応用倫理学講義・第1巻』（責任編集）（2004年）など、氏は多くの共編著を刊行し、研究者のみならず多くの一般読者にも開かれるべく、平易でありながらも実験性に富む独自の文体で思索を演じてみせる。これは、さまざまな問題と境界を接する哲学の面白さを伝えつつ、読者に臨床哲学へと思考の構えを変容させるよう促す氏の一貫した姿勢の現れである。同様に、氏は『岩波講座哲学』全15巻の編集委員に名を連ね、執筆・編集の双方の面から臨床哲学の社会への浸透に尽力する。

以上の二つの系が哲学者・中岡成文として統合されるのが臨床哲学である。氏は盟友、鷺田清一氏とともに臨床哲学を提唱し、命名者である鷺田氏に勝るとも劣らない精力的な活躍によって、アカデミズムとそれ以外の社会の現場への臨床哲学の浸透に大いに貢献する。アカデミズムにおいては、日本倫理学会、応用哲学会などの主要学会において応用倫理から臨床哲学への変容の必要を繰り返し主張し、後続の研究者たちに道を開いた。

氏の臨床哲学研究の根幹には、看護・医療・福祉の実践者たちときめ細やかな対話を重ねることによって培われたケアの思考活動がある。氏は、あえてそれを感性や情緒に依存する表現をとらず、『臨床的理性批判』（2001年）に見られるように、先の二つの系を統合する理性概念に、従来の哲学研究にはない豊かなニュアンスと奥行きを与え、思考することに本来そなわる柔軟性を回復させるとともに、哲学的著作に対話的な息吹を与える文体の実験を展開する。同書は理論研究と実践の双方にまたがる画期的な試みである。同じく『試練と成熟——自己変容の哲学』（2012年）においては、セルフケアの意味を深化させ、哲学理論と経験的事象を織り交ぜつつ、極めて多面的な境界を有する自己とその変容を描き出す。同書は氏の臨床哲学の一つの到達地点でありながら、絶えず変容を繰り返す生身の氏の分身でもあり、対話と実践を重視する氏ならではの、書くことによる哲学実践の模範となるテキストである。

また、氏は早くから国際的交流に注力し、臨床哲学と並走する哲学実践に関して世界レベルでの調査を重ねつつ、各地で活躍する実践者・研究者と親交を深め、臨床哲学の国際的ネットワークの土台を築いてきた。氏は日本の哲学研究者として初めて哲学プラクティス（カウンセリング）国際会議に招待され、臨床哲学をアピールする講演を行うほか、韓国、台湾、中国などの東アジア地域における哲学プラクティス研究者との継続的な交流を積極的に図り、海外への臨床哲学の成果の発信に多いに貢献している。

さらに、哲学プラクティスの日本での展開に関連して、氏は哲学カフェをはじめとする哲学的対話の活動に精力的に取り組む。2005年に組織された哲学実践のための団体、カフェフィロの創設メンバーに名を連ね、大学研究者ではなく市民としての対話への参加を貫きつつ、人々と

もに哲学を実践する氏の姿勢は、教授という地位に居座ることのない哲学者として参加者その他に新鮮な印象を残す。

教育面においては、個々の学生への熱心な指導は言うまでもなく、授業外での学生の自主学習に積極的に関与し、教育環境の充実に寄与する。鷺田氏の文学研究科長就任以降、臨床哲学研究室の研究と教育を牽引し、この新しい分野における多くの修士号および博士号取得者を世に送り出した。多忙にかかわらず社会人学生や留学生に対するきめ細やかなケアを怠らず、さまざまなハンディキャップやニーズに適確に対応するほか、文学研究科においていち早く英語で授業を実施するなど、語学面でのサポートに関して熱心に取り組んできた。

大阪大学での研究マネジメントにおける功績として、文学研究科での各種委員・委員長・室員を歴任し、研究科をさまざまな側面から下支えするほか、2002年から2003年まで鷺田清一氏とともに、科学技術振興調整費を受けてなされた研究「臨床コミュニケーションのモデル開発と実践」の研究統括を行い、大阪大学におけるコミュニケーションデザイン・センター設置のための基盤づくりに寄与し、その後同センターの初代センター長として、国立大学としては初めての大学院レベルでの共通教育および高度教養教育の実施のために重要な任務を果たす。さらに2002年から2007年まで、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」「臨床と対話」研究グループリーダーとして、大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科・コミュニケーションデザイン・センターの4つの研究機関にまたがる領域横断的な研究組織を統括し、異分野の研究者や実践者とともに実践的研究の新たな展開を導く。

以上に加え、応用哲学会理事、関西倫理学会委員、同編集委員会委員、日本倫理学会評議員、関西哲学会委員、日本フィヒテ協会委員を歴任するほか、独立行政法人日本学術振興会特別研究員等審査会委員、国立循環器病研究センター治験審査委員会委員、先端医療センター生命倫理審議会委員、先端医療センター映像医療審査委員会委員、独立行政法人大学入試センター教科科目第一委員会委員を務め、学術・医療・教育の諸分野において重要な貢献を果たす。